ケアのある学び

益田 啓裕
追手門学院大学心理学部講師

大学で教鞭をとった経験のある者なら誰しも、授業への動機が低く履修途中で課題を出さなくなりフェイドアウトしていく学生や、しっかりと課題をこなし成績優秀であったのに唐突に休学や退学に至る学生に出会うことがあるだろう。彼らに何が起きていたかは、ゼミ担当でもない限りたいていわからずじまいである。前職が児童福祉施設で心理職として働いていたこともあり、大学教員として授業をしていても、うまく取り組めない学生や、表情悪く座っている学生の方にどうしても目が向いてしまう。つまり、教えている時もケアを意識してしまう。

大学は高等教育機関なのだから教員は学生のケアに意識を向けなくてもよいのではないか、という考えもあるだろう。とはいえ、大学教員になるまでの数々の学びの中で、私たちも大なり小なりケアを受けてきた。ケアとは大切な人を気にかけることである。毎日冷や汗をかきながら授業する大学教員1年目の私を、大学はかなり気にかけてくれた。ベテランの教員は忙しい中メンターとして私の授業を参観し、有益な助言をたくさんくださった。FD研修では授業の基礎を丁寧に教えていただいた。テクニカルな助言や知識だけでなく、大学教員1年生を気にかけてくれるまなざしに励まされた部分は大きい。

自らがケアされた体験は誰かをケアすることにつながる。大学教員に少し慣れてきた頃から、自分が大学教員としてケアされたように、学生への教育にもケア要素を意識して含めるようにした。これは別に学生にカウンセリングを行ったり、必要以上にやさしくしたりするというわけではない。ただひたすら、一人ひとりの学生がどのように教室の場で授業を体験しているかに思いを馳せ、できる限り学生が授業に取り組みやすい環境と関係性を築くよう心掛けた。少し早めに教室に行き、既に教室に到着している学生たちに話しかけた。天気や近況などについて雑談し、学生の調子をつかむようにした。エアコンの効きにも気を配った。学生が学びで迷子にならないように、授業冒頭では科目全体の構造と

流れを毎回示し、今どこを学んでいるか確認した。理解を確実にするため、テキストやプリントの解説に加え、映像を活用し、教員自身の実務のエピソードを紹介した。クイズや問いかけなどのワークにより、双方向のやり取りを試みた。

そのような試みの中で、学生が自分ごとに感じられるような問いかけには反応がよいことに気づいた。担当している福祉心理学という科目で日本の社会福祉制度を紹介する際に、任意で行うワークとして、学生が自分の袖をまくり上腕部の左右どちらかにBCG接種の痕があるかどうか確認させた後、日本の予防接種事業が乳幼児の死亡率の減少に寄与したことを話すと、学生はより実感を持って社会福祉制度の重要性を理解したようだった。

冒頭で触れたような学生に限らず、発達の途上にいる青年期の大学生の多くは、まだ自分のケアで精いっぱいなのかもしれない。そのような学生には、まずは自らに目を向ける一人称の学びから始めた方がよい場合もあるのではと考えるようになった。そのためには、まずは教員が学生を気にかけることが求められているように思う。

図らずもコロナ禍に伴う授業形態の変更により、教員が学生を気にかけることの重要性を再認識することとなった。変更されたオンデマンド授業では、対面授業のケア要素を可能な限り維持すべく、できる限り教員の顔が映った動画を作成して、学生が自分に話しかけられていると感じられるよう心掛けた。また、3密を避けた生活で募る孤独が少しでも和らぐよう、毎回オンラインでの提出を求めるワークシートの最後の設問には、授業に関係なくてもかまわず、自らの近況や関心があること、教員に聞きたいこと、伝えたいことなどを書いてもよいと伝え、書かれた内容にはできる限り反応するようにした。そのような取り組みは一定学生に届いたようで、学生の授業アンケートには「映像で教員が顔出しをしてくれると授業の安心感がぐっと上がる」、「質問をしたら返事をくれてとてもうれしかった。大学に入って初めてまともに先生とやりとりできたと感じた」という感想があった。

学生に教えていると、自分が大学生だった時にゼミの指導教員にケアしてもらった、とりとめのない記憶が蘇ることがある。最近やっと、その指導教員の研究内容の面白さが理解できるようになった気がする。そのようなケアのある学びの循環が続くことを夢見て、今日も提出される学生の課題にせっせとコメントを返し続けている。

関西学院大学建築学部　・　角野 幸博［建築学部長］

建築と都市をひとつながりで学ぶ

1 出発の原点

2021年4月、関西学院大学神戸三田キャンパスに、1学部1学科、学年定員132名の建築学部が誕生した。近代以降、日本の建築教育の多くは工学系の学部で行われてきたが、テクノロジーとアートを分けてとらえる傾向が強い欧米の大学には、建築学部という学部がいくつもある。建築学に工学的な知識や技術が不可欠なことは言うまでもないが、その固有性を意識して、国内でも建築学部を開設する大学が現れた。2020年度時点で、8大学に設立されており、関西学院大学建築学部は国内で9番目の建築学部となった。さらに2022年度には新たに2大学が設立を予定しているという。これら建築学部の多くが工学系の学部から独立したのに対して、本学では文理融合型学部から軸足を工学に移して誕生した。

本学の建築教育は、すでに1995年の総合政策学部開設時に、その種がまかれていた。同学部は「自然と人間の共生、人間と人間の共生」という理念のもと、文理融合の学部として神戸三田キャンパスに設立された。建築・都市の領域に関しては、当初は環境政策や都市政策の枠組みのなかで、建築の知識を持つジェネラリストの育成にとどまっていた感があった。ところが建築への学生の関心が高まるとともに建築士資格取得へのニーズが強まり、2009年に総合政策学科、メディア情報学科、国際政策学科、都市政策学科の4学科体制になると同時に、都市

政策学科を中心にして、一級建築士受験資格を取得できる「建築士プログラム」が定員40名でスタートした。

文理融合学部での建築教育は、建築学に求められる知識や技術を思い起こしてみると、極めて自然なことであった。建築学は、テクノロジーとアートにまたがる領域にあるとともに、社会学や経済学、歴史学や地理学などとも深く関わる。また建築技術者の職能や、実際に活躍する現場を考えてみると、総合政策学部のなかで建築教育を行うことは、理にかなったものともいえた。

2 建築学部設立の決断

だが、総合政策学部全体で学生を一括募集し、学科の分属と建築士プログラムの受講登録は2年生からとした結果、建築を学ぼうと入学したものの同プログラムを受講できない学生が現れた。だからといって同プログラムの定員を増加させることは、総合政策学部本来の教育理念からすると限界があった。また学部での建築教育と大学院での教育研究をシームレスに行うことを意識したが、本学大学院への内部進学者は少数にとどまり、学部卒業後に他大学の大学院への進学希望者が続出した。

一方で、関西学院大学全体の総合戦略として、理工系学部の強化、充実が進められることとなった。総合政策学部と理工学部とで構成されていた神戸三田キャンパスでは、理工学部を再編して理工系学部のさらなる充実を図るとともに、総合政策学部との連携を深めて、「次代を拓く文理・分野横断型の学び」を実現できるキャンパスづくりを進めることが決まったのである。再編にあたっては「『持続可能なエネルギー』の研究を軸とする地球規模の課題解決」「国境を越えた学びの充実と拡充」「文理横断の教育システムの確立」「実社会での学びを通した起業家の育成」という4つの特徴を掲げ、「境界を越える革新者」の育成(Be a Borderless Innovator)を、キャンパスを挙げて進める。こうした理念のもと、理工学部を理学部、工学部、生命環境学部という3学部に再編・強化するとともに、工学に軸足を置きなおした建築学部を創設することを決断したのである。

もちろんこのような内部事情だけではない。世界レベルでの建築や都市をとりまく環境の変化と、建築家の職能

の拡大が背景にある。アジア・アフリカ諸国等では急激な都市化と人口増加が進んでおり、地球規模での環境問題が深刻化するなかで、地球環境に配慮した持続可能で秩序ある都市開発が求められている。国内に目を転じると、少子高齢化と人口減少のなかで、都市の再生・再編のための計画づくりが急務である。そこではスクラップ・アンド・ビルド型の建物建設だけでなく、既存建物のリノベーション(再生)やコンバージョン(用途転換)の重要性も高まっている。そして国内外を問わず、個々の地域社会では、最先端のデザインや技術の導入と、地域固有の生活文化の継承・発展との両立が求められる。

また情報技術の進化は、都市や建築の姿を大きく変えるとともに、建築技術者の仕事の幅をさらに拡大させている。建築設計ではCAD(Computer Aided Design)やBIM(Building Information Modeling)が普及し、都市計画ではスマートシティ実現への関心が高まる。建築設計においても都市計画においても、様々なデータ解析技術が急速に進化しており、これらを駆使した計画手法の開発が進められている。

建築系学科を卒業した学生たちの活躍の現場は、建築の設計・施工に留まらない。開発企画、不動産、行政、都市計画コンサルタント、建築材料、インテリア、公益企業等多岐にわたり、建築工学的知識だけでは業務に対応しきれないのが現状である。さらに、市民らとともに地域社会の未来を考え、まちづくりに携わる際にファシリテーターの役割を果たし、時にはリーダーシップをとることも、建築技術者の大切な役割となっている。

3 「関学建築」の特徴

カリキュラムでは、一級建築士試験受験資格取得のための科目を必修科目として用意することは言うまでもない。4年次までの一貫したデザイン教育プログラムを整えることに加え、「関学建築」ならではの特徴と強みを意識する。対象とする学問分野は、建築物の設計と生産に関する領域と、都市空間の計画・管理・運営に関する領域とに分けられる。工学的知識と技術を基礎とした、美しくて安全な建物と都市空間を設計・施工するための技能に加えて、それらを適切に運営・管理するための技能を修

得する。また建築デザインと都市デザインを連続的で一体的な生活空間のデザインととらえ、これらを取り巻く地域社会や自然環境との関係にまで踏み込んだ課題発見や、計画提案ができる能力を育む。

そのために、以下に示す3つの視点を重視している。

第1は、「デザイン＋マネジメント」の重視である。工学的知識と技術をベースにして、美しく機能的な建築や都市空間をつくるためのデザイン能力に加えて、安全で持続可能な生活空間を支えるための、計画、建設、管理、運営についてのマネジメント能力を修得する。そのために建築設計関連科目に加えて、都市や地域に関連する科目を充実させ、生態学やコミュニティデザインも学ぶ。

第2は、「工学＋人文社会科学」の重視である。建築学は、自然科学、人文科学、社会科学の総合的な体系のもとに成立する学問であり、最先端の建築技術やデザイン能力はもとより、人文科学・社会科学など幅広い側面から建築・都市空間を理解し、計画できる能力が求められる。幅広い知識を持ち、それぞれの地域固有の文化を理解するために、英語はもとより多様な外国語を学べる機会も提供する。なお神戸三田キャンパスに所在する理学部、工学部、生命環境学部、建築学部そして総合政策学部では、5つの学部それぞれが分野横断科目群というものを用意している。文理の壁を越えた分野横断の学びをキャンパスレベルで実現しており、建築学部の学生はもとより、教員もより専門的な科学技術や政策学に触れることができる。

第3は、「グローバル＋フィールドワーク」の重視である。学年が進むとともに、社会の現場で直接学ぶＰＢＬ(Project Based Learning)型授業やフィールドワークの機会が増大する。本学は海外に多くの協定大学があり、国際機関とのネットワークも有している。この強みを最大限活用して1年生からでも参加可能な海外研修プログラムを用意しており、学年の進捗とともにその機会を拡大させる。なお建築学部は、新型コロナウイルスが猛威を振るう時期にスタートした。1年生のうちから参加可能な海外プログラムを用意したものの、オンラインでの対応とせざるを得ず、本格的な実施は次年度以降に持ち越されることになった。

活躍の場が世界に広がるなかで、個々の地域文化を理解し尊重するためには、日本の建築文化について誇りを

もって解説できる知識も必要と考える。国内のフィールドワークも充実させて、日本各地の建築文化の実態に触れるとともに、地域社会のどのような現場で建築の専門家が活躍しているのか、どのような職能が求められているのかを学ぶ。フィールドワークでは、グループワークによる調査、分析、計画提案を行うなかで、謙虚さと協調性と健全なリーダーシップをもって国際社会で活躍するための、コミュニケーション力とプレゼンテーション力を磨くこともできる。

関学建築の研究・教育を支えるのは、16名の専任教員と専門的技術を有するスタッフルームの職員、そして煩雑で膨大な事務作業をこなす事務室職員たちである。専任教員の構成を以下に示す。建築設計分野では、大手建設会社設計部勤務や自ら建築設計事務所主宰の経験をもつ教員を複数擁する。建築構造デザイン、建築生産、建築環境工学、建築史、ユニバーサルデザインの専門教員も配している。都市デザイン・都市計画の分野では、公共空間のデザインや都市再生プロジェクトの専門家、地方都市の中心市街地や中山間地域の再生に取り組む専門家、そして地域防災の専門家を擁する。また、アジア諸国での都市開発についての豊かな実務経験を持つ教員や、ランドスケープデザインを専門としながらコミュニティデザインという領域を確立した教員もいる。さらに建築や都市に深い関心をもって、学生たちの海外への飛躍を支える英語専任教員も含まれる。なお、16名のうち13名は博士号を、8名は一級建築士資格を、そして2名は技術士資格を有する。

4 関学で建築を学ぶということ

人々の安全や財産に深く関わるとともに公共財としての側面をもつ建築の専門家には、高度な倫理観をもって社会に貢献する姿勢が求められる。関西学院大学のスクールモットーである「Mastery for Service」は、建築や都市計画を学ぶ者にとっても不可欠の理念である。また本学では、学部ごとに聖書に由来する聖句を定めている。建築学部の聖句は「希望はわたしたちを欺くことがありません」である。これは新約聖書ローマの信徒への手紙第5章の「わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、

忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません」からとったものであり、苦難、忍耐、練達を経て生まれた希望こそが、建築の学びを深めることの目標であり道標となると考える。

また関西学院のキャンパス設計に深く関わった建築家、W・M・ヴォーリズからは多くの事を学ぶことができる。彼によって設計され、そのデザインを継承した西宮上ヶ原キャンパスは日本建築学会賞を受賞した。彼のデザイン理念は神戸三田キャンパスの計画にも導入されている。さらに、異国に身を投じ地域に溶け込みながら建築文化の高揚に貢献したヴォーリズの生き様からも、多くの学びを得ることができる。建築学部では今、ヴォーリズの設計図書と関連資料を収集し、その設計思想やヴォーリズ建築の保存再生ならびにこれらを活用した地域再生手法を研究する「ヴォーリズ研究センター(仮称)」の設立準備を進めている。そこでの研究成果は、関学ならではの建築教育にもつながるものと考えている。

建築学部が本拠を構える神戸三田キャンパスは、兵庫県三田市に立地する。周辺には、城下町の名残をとどめる歴史的市街地、実験的なニュータウン、里山が息づく農村集落があり、ゆたかな空間的広がりのなかで、建築と街と自然との多様な関係を学ぶことができる。豊かで美しくゆったりとしたキャンパスで、都心型キャンパスでは実現できない学びの方法を追求しながら、ここを学びの拠点として世界へ展開することを目指している。

神戸三田キャンパス全景